

# 京都への恋文

第一回～第三回優秀作品集

京すずめ 20年のあゆみ



一般社団法人 京すずめ文化観光研究所

## 目次

|    |                  |     |
|----|------------------|-----|
| 1  | ご挨拶              | …2  |
|    | 第一部              | …3  |
| 2  | 祝辞               | …4  |
| 3. | 第一回恋文            | …15 |
|    | 概要、講評、受賞作品       |     |
| 4  | 第二回恋文            | …28 |
|    | 概要、講評、受賞作品       |     |
| 5  | 第三回恋文            | …38 |
|    | 概要、講評、受賞作品       |     |
| 6  | 京都への恋文に寄せて       | …45 |
|    | 第二部              | …49 |
| 7  | 京すずめ創立 20 周年を迎えて | …51 |
| 8  | 京すずめ瓦版から         | …70 |
| 9  | 編集後記             | …71 |
| 10 | 協賛企業             | …72 |

## 1. ご挨拶

創立 20 周年を迎えて



一般社団法人京すずめ文化観光所  
理事長 土居好江

お陰様で、京すずめ文化観光研究所は 2020 年 9 月に創立 20 周年を迎えさせて頂きました。皆様には心から感謝申し上げます。京すずめは、「そこに居るだけで心が豊かになるまち・京都」を理念に、日常の暮らしから京都に宿る文化、歴史、伝統、町衆の普遍的な精神(こころ)を次世に繋ぐ活動を続けて参りました。

10 年前から行っております公募事業「京都への恋文」の優秀作品を、創立 20 周年に当たり、かねてからの願いでございました冊子として、発刊させて頂きます。コロナ禍の中、京都に行けない方々にもお読み頂き、リモートでも、ご訪問頂ければ幸いです。

20 年のあゆみの中で、現地現場で開講した京すずめ学校は、京都ならではの講師の方々と「水」「土」「木」「火」「活」等のカリキュラムを組み、その中で「京都愛物語」は先人文人がどのように京都を愛したのか、「川端康成の愛した京都」からはじめました。このカリキュラムの内容は「京都への恋文」そのものです。

ご縁があり『古都』の映画化が進み、京都の美しい風景と京都人の人情を 2016 年に、お披露目することができました。

普遍的な価値を大切にしてきた京都は、自然と文化が交差して「見覚え、聞き覚え、見て覚え」で究めた千年の職人技が、明治の近代産業へと繋がり発展して参りました。ベンチャー企業が京都に多いこともうなずけます。

現存する日本最古の飲食店・あぶり餅一和では千年前から元旦に、茶店のあちこちに「鏡餅、若水、お雑煮、お灯明」をお供えする風習を今も受け継いでいます。「そこに居るだけで心が豊かになるまち・京都」とは、こういう先人の精神(こころ)を受け継ぎ、守るべきものを大切にしてきたまちです。少しでも、この冊子から読み取って頂ければ幸いです。

# 一部

京都への恋文

## 2. 祝辞

### 祝辞



文化庁参事官（文化創造担当）

三木忠一

この度、京すずめ活動20周年に向けた取組として“第1回～第3回「京都への恋文」総集編冊子発行の運びとなりましたことを心よりお慶び申し上げます。これまでこの企画をはじめ、人々の古都への関心を高める取組に御尽力なされた京すずめ文化観光研究所の皆様にご敬意を表します。

平成13年の遊悠舎京すずめ創立以来、京すずめの皆様は京都の奥深い魅力を暮らしの中から発掘・発信し、京都町衆が受け継いできた伝統文化を現場で学び継承して来られました。文化庁地域文化創生本部においても、平成29年の設置以来、文化芸術資源を核とする地域振興や生活文化の振興等に取り組み、京都から全国に向けて文化芸術の多様な価値を発信し、我が国の文化の維持、継承、発展に努めてまいりました。引き続き、皆様のお力添えをいただきながら、地域文化の振興等に取り組んでまいりたいと思います。

20周年を迎えるに当たり、「京都への恋文」をはじめとする京すずめ文化観光研究所の活動が、今後ますます京都のまちの魅力と伝統文化を国内外そして未来へと繋ぐことを祈念いたします。

## 祝 辞



京都府知事 西脇隆俊

京都を愛する方からの「京都への恋文」が、多くの方々から支えられ、第3回を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

京すずめ文化観光研究所におかれましては、今年で活動20周年の節目を迎えられました。この間、芸術家や職人、有識者の方が講演を行う「京すずめ学校」の開講などの取組を通じて、京都の暮らしに宿る奥深い文化を未来に伝えることに努めてこられ、土居理事長をはじめ関係者の皆様方の長年の御活動に心から敬意を表します。現在、観光業のみならず様々な産業が新型コロナウイルスの感染拡大により大きな影響を受けておりま。

京都府では「WITHコロナ社会」のもとで、「新しい生活様式」に対応した文化・観光の実現等を目指して、京都の文化や資源を守り、改めて皆様に京都の魅力を再発見・再認識していただけるよう、オール京都で取り組んでまいります。引き続き皆様の御理解と御支援をよろしくお願いいたします。

結びにあたり、「京都への恋文」がこれからも多くの方々に親しまれ、京都の魅力がさらに発信されますよう祈念いたしますとともに、京すずめ文化観光研究所の御発展を切に願い、御挨拶とさせていただきます。

## 祝 辞



### 京都市長 門川 大作

文章、俳句、和歌、さらには写真や絵など、様々な方法で「京都」への思いを表現する「京都への恋文」。これまでの珠玉の作品をまとめた冊子が発行されますことを、心からお慶び申し上げます。本事業の実施に御尽力されました、土居好江理事長をはじめとする一般社団法人京すずめ文化観光研究所の皆様には、深く敬意を表します。

私も審査委員の一人として恋文を多数拝見し、そこに描かれた京都の美しい情景や懐かしい光景に胸が熱くなりました。そして、京都を愛する多くの皆様のおかげで、京都は京都であり続けられる。そんな思いを新たにしたいところです。コロナ禍の下、私たちの日常は変化を迫られています。しかし、暮らしに息づく京都の文化や伝統は、変わらず引き継いでいくべきものです。本市では、美しいこのまちと文化をしっかりと守り伝えてまいります。皆様のお力添えをお願い申し上げます。結びに、皆様の御健勝と御多幸を祈念いたします。

京すずめ文化観光研究所 顧問 井戸智樹  
一社)世界文化遺産地域連携会議 お世話役  
元歴史街道推進協議会事務局長

土居さんから、当時烏丸六角にあった私の事務所で、初めて「京すずめ」の構想をお伺いしたのは前職歴史街道推進協議会事務局長時代。

あれから、なんと20年以上の歳月がながれたこととなります。京都には本当に色んなものがあり過ぎて、私のような「よそ者」からすれば、どこからどう勉強したらいいのか分からない。しかも、奥ゆかしい方や「いけず」の人も多く(笑)、生の身内話を聞かせてもらえる機会など、そうおおくない?……ということ、大変面白く、かつ大事な活動になるのではないかと直感しました。

以降、名前ばかりの役員に加えていただき、特に何の力になることもなく……よく言えば、ただ静かに「見守ってきた」だけで今日に至ります。

こういう活動はアイデアとしては口にするのは簡単ですが、形にするのは難しい。また始めることはできても、それを長く続けるのは大変なことです。京都への恋文、映画「古都」の実現、おくどさんサミットやHPなど、一つ一つの想いを形にされてきた日々にはただただ感服するのみ。

今後も質が高く、息の長い活動を続けてください。あとそろそろお互い、後継人材の育成も視野に入れてきましょうね。

京すずめ文化観光研究所 顧問 齋藤 修  
元京都新聞社代表取締役

時がゆったりと流れる

ふいに、英語まじりの京ことばが通勤バスの後部座席まで聞こえてきた。どちらから?どちらへ?それやったらエンペラーがお住まいになったインペリアル・パレスへ行かばったら…。首を伸ばすと、白髪のご婦人が外国人観光客ににこやかに話しかけている。応じる外国人も笑顔だ。まわりの乗客たちが「京都をゆっくり楽しんでいって」といわんばかりに大きくなずいている。まったりした空気が車内に満ちていく。

十年ばかり前になるだろうか。乗り合わせた京都市バスで出合った光景だが、折にふれ、思い出される。



老紳士が語る二条城の故事来歴を、修学旅行生たちが汗をふきふきノートして、車内が即席の教室になっていることもあった。

そうした京都人と入洛客との和気あいあいを見ると、わたしはいつも「これが京都だなあ」としみじみ感じた。そして、異郷の人たちをやさしく包み込む、このゆったりとした時の流れに「千年の都」の底力を思った。

京都は、794年の遷都以来、政治、経済、文化の中心だった。それゆえに、数えきれない栄枯転変があり、その時代、時代を生きた人々の喜びと悲しみがあつた。それらすべての歴史を飲み込んで、時は流れ「千年」を数えた。この圧倒的な時間を背負って、今日の円熟した京都がある。京都人の暮らし方がある。そして、ゆったりとした時が流れているのだらうと思う。

わたしたちは今、抑制なき経済的欲望に突き動かされ、分秒を惜しんで「効率化」に邁進する時代を生きている。だからこそ、国内外から京都を訪れる人たちには、名所旧跡もさることながら、ゆるやかな「時の流れ」に身をゆだねていただきたいと思う。

京ことばに表徴されるおっとりした、包み込むような時の流れこそ、京都の真髄である。ただ、近ごろは、冒頭に紹介したような光景を見かけなくなった。京都も効率化の潮流に押し流されつつあるのではないか、と気がかりである。

京すずめ文化観光研究所 顧問 奥田正叡  
鷹峯 常照寺 住職

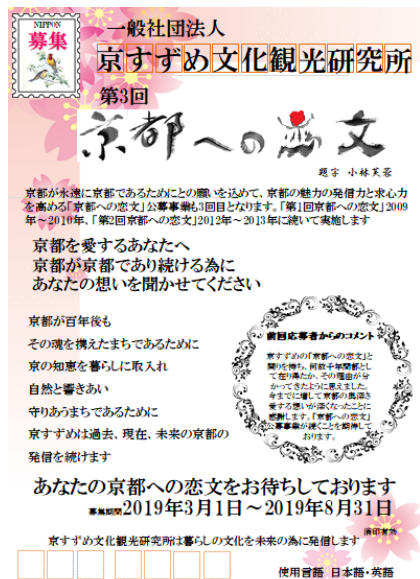
江戸時代初期、洛北鷹ヶ峰に本阿弥光悦や俵屋宗達らによって法華芸術村が創設された。その文化的歴史のある地に住む私も京都をこよなく愛している。光悦とほぼ同時代に発刊された『京雀』（きょうすずめ）は、「一人旅の人でも平易に京都がわかるように」と思いを込められた画期的な京都観光の案内書。情報通の京都人を「京雀」と呼んだとも聞く。

『京雀』の現代的復活をめざし結成された「遊悠舎京すずめ」（現、京すずめ文化観光研究所）は、2020年に創立20周年の嘉辰を迎えた。その記念として冊子『京都への恋文』を発刊することになった。これまでご支援いただいた皆様には心から感謝申し上げます。

思い返せば、土居理事長とは、彼女が松下政経塾（京都政経塾）に在籍中、

講師として招かれて以来のご縁。その中で印象深いことがあった。京すずめ学校の企画で、老舗和菓子店の関係者との対談だった。500年の歴史を持ち、京都御所にも親しく出入りを許されたその老舗は、明治維新の東京奠都の祭にはかたくなに京都に留まった。「声なくして人を呼ぶ」を起請文に掲げ宣伝しない家風を堅持。他方、時の流れに沿うように東京に出店した老舗和菓子店もあった。「京都の裏切り者ですわ」と一言。白髪女性の柔らかな京言葉に、「京都であり続けること」への自尊心を感じた。「田舎の学問より京の昼寝」は言い得て妙な諺だ。京都は山紫水明、歴史と文化の溢れる町。しかし、今、本来の「京都らしさ」が失われつつある。「京都が京都であり続けるために、京都を愛する心を提言したい」は京すずめ発会以来の願いだ。皆様から寄せられた京都への恋文から人生の分岐点、安らぎの場、奥深さと地聖を感じる町など様々な京都への愛情が伝わってくる。仏道修行の箴言に「切に祈ることの大事」がある。コロナ禍の夏、境内を散歩すると坂村真民先生の「念ずれば花ひらく」の歌碑が夕立に清められ静かにあった。

# 京都への恋文



## 「京都への恋文」誕生の経緯

2005年頃から国内外の観光行政官や旅館の女将さん等の研修視察団の企画や講師をお引き受けしていました。自分では気づけなかった京都の魅力を何度も教えられました。多彩な視点で語られる魅力は京都活性化のヒントになるとの思いが「京都への恋文」に繋がりました。

そこで、京すずめ学校のカリキュラムに「京都愛物語」を組み、「京都愛物語オープニング講座・川端康成の愛した京都」をスタートさせました。それは川端康成先生の京都への思いを『古都』から学びたいと思ったからです。



京すずめ学校京都愛物語オープニング講座「川端康成の愛した京都」  
京すずめ学校 2008年 於北山杉記念館

- 1、川端康成の愛した京都
- 2、黒澤明の愛した京都
- 3、紫式部の愛した京都
- 4、徳川慶喜が愛した京都
- 5、土方歳三が愛した京都
- 6、坂本龍馬が愛した京都
- 7、司馬遼太郎が愛した京都
- 8、徳川家康が愛した京都

8 講座を現地現場で開講し京都の魅力を再発見したのです。川端康成先生の『古都』の映画化もこの講座から企画が始まり、「京都への恋文」が誕生したのです。3回の公募で、アメリカ、イギリス、中国、韓国等の世界各地から、日本全国から5才から 87 歳までの多世代にわたりご応募賜りました。また、立命館アジア太平洋大学の教授・田原洋樹先生の授業で取り上げて頂き、「京都の圧倒的なブランド力を痛感した、京都は日本の必修科目である」との、力強いお言葉も頂戴致しました。

入賞作品と心にのこる作品を皆様にご高覧賜りたく、冊子として発行させていただきます。第一回、二回の審査委員長の川端香男里先生、第三回審査委員長の井上章一先生、審査委員の先生方からはそれぞれの京都への想いをお伺いでき、川端康成先生の京都への想いを香男里先生からお伺いできたことは人生で最高の宝です。

ちょうど、康成先生ご生誕 110 年を記念して香男里先生や京すずめの皆様と、北山杉の中源様のご所有の山林で記念植樹も行ったのが2008年、思い出をつくることができました。

また、黒澤明監督が定宿にされていた旅館石原のご当主や女将さんからも監督がどのように京都に魅かれておられたかを黒澤ルームで開講させて頂き、歴代の天皇がどのように京都を愛されていたのかを京都御苑でも開催させて頂きました。この講座から誕生したのが「京都への恋文」公募事業です。

審査委員会では、時には真逆の意見を交換された川端先生と井上先生とのやりとりは「知性の対決の現場に居合わせた」とも思えるほどの貴重な体験でした。

京すずめ創立から 20 年の間、職人さんの「見覚え、聞き覚え、見て覚え」の修行方法は、現在の教育界の欠落した部分を補う大切な視点であるご訪問先でご教示賜りました。

「京都への恋文」に入賞された作品を通して、これからの京都のあり方のヒントが得られることでしょう。ご後援、ご協力賜りました企業様、賞品をご提供賜りました企業様、更に今回の冊子発行にあたり、ご協賛賜りました企業様に心から感謝申し上げます。

2008年6月15日 京すずめ学校京都愛物語

川端康成の愛した京都 講義録 川端康成記念会理事長 川端香男里

やや曇り気味の天候の中、北山杉山林所有者の中源(株)の中田社長のご協力を得て、川端康成氏生誕110年と交流の深かった東山魁夷画伯生誕100年を記念して、講師の川端香男里先生、ご来賓の日本画家浜田泰介先生ご夫妻、川端康成氏の京の定宿だった柊家旅館の西村女将らと共に、京すずめの会員が記念植樹を行いました。また、2005年ドイツ・フランクフルトで開催された映画祭 Nippon Connection でグランプリを得た日本映画「二人日和」の受賞および主演の栗塚旭氏が参加されており、これを記念する植樹も行いました。

第2部 講演「川端康成の愛した京都」講師 川端香男里先生 (財)川端康成記念会理事長 東大名誉教授 故川端康成氏娘婿 この美しい日本の自然を残し、守り、後世に、いかにして引き継ぐことができるのか 川端康成が京都をテーマとした作品『古都』は、朝日新聞の連載小説として1961年～62年に掲載されました。その頃、康成は、複数の小説を同時並行に執筆していました。『千羽鶴』と『山の音』がそれであり、また、『古都』と『美しさと哀しみと』もそうでした。驚くべき筆力と言わざるを得ません。康成の戦後の文学に係わる活動を述べます。まず、日本ペンクラブの活動です。日本は戦争に負けましたが、日本に対しては批判ばかりで、誰も日本の良さを評価しませんでした。

そこで、康成は、文学という手段で平和に貢献したいと考え、熱心に活動しました。また、康成は美術品の収集にも熱心でした。戦争直後の物の無い時代ですから、没落 旧家の持つ美術品を買い集め、川端コレクションを作りました、このため、多額の借金を抱え、一生借金だらけの人生でしたが、この借金を執筆のエネルギーに変えていた節が窺えます。『古都』は、康成が下鴨に家を借り、そこで生活をしつつ仕上げた作品です。この作品の 解釈ですが、日本での評価は芳しいものではありませんでした。康成自身も「あまえっこ小説」と言っていたのですが、ノーベル賞の対象となったのは、実はこの作品でした。この作品が最初に外国語で翻訳されたのは、ドイツ語でした、北欧の人々はドイツ語を理解しますので、スウェーデンの人にも分かりやすく、しかも当時は、都市を主人公した小説、すなわち都市小説というジャンルがあり、これがモダンとされていました。

つまり「古都」は、モダンな美しい都市小説だとして、評価されたのです。さらに、日本人自身が京都という、古都を、どのように評価しているのかという文化力

も問われ、『古都』はリアリズムの世界と対比的な、ファンタジーの世界を表現し、しかも多くの寓意、比喩を含むものとして、外国で高い評価を得ることになり、ノーベル賞に結びついたと思われます。作品『古都』で表現されている美しい双子の娘は、花の精であり、桜の老木の幹の片隅に咲くスマレの花、また、壺中の鈴虫も意味ある寓意として理解されたのでしょう。同時に、古都京都の四季の移ろいを鮮やかに捉え、京都の歳時記でもありました。次に康成と東山魁夷画伯の関係に触れます。二人の交流は、1955年から1962年に康成が亡くなる17年間でした。最初は魁夷氏が康成の美術コレクションを拝見したいとの申し出があり、以来、芸術家同士の頻繁な交流が始まりました。康成が1962年に文化勲章を受章した際には、魁夷氏よりその作品「冬の華」、これは『古都』の文庫本の表紙カバーとなっています。さらにノーベル賞受賞の際には「北山初雪」を贈られています。この二人の間でおよそ100通の往復書簡が交わされ、各地で展示会が行われています。康成は、書簡の中で魁夷氏に、今のうちに京都を書いて欲しい、京都の姿はやがて消えるかもしれないと伝え、それが、東山画伯の「京洛四季」として、結実しました。私が理事長を勤める「川端康成記念會」は、康成が全力を挙げて日本の美を守ろうと努力し、貢献を行ったことを後世に伝えたいとの思いで、設立したものであり、美術品、書簡の展示などを、全国各地で開催しています。最後になりますが、著名な画家の安田靫彦も美術品のコレクターであり、良寛和尚の作品の収集家でもあり、康成と情報交換をしていました。康成は、ノーベル賞受賞スピーチ「美しい日本の私」で良寛の辞世の句を引用し、人は死んだら何も残せないが、自然はあるがまま残ると語りました。この美しい日本の自然を残し、守り、後世に、いかにして引き継ぐことができるのか、これが川端康成の課題であったと考えるところです。

### 3. 第一回京都への恋文

概要、講評、受賞作品

第一回京都への恋文公募期間：2009年3月～2010年2月末日

第一回「京都への恋文」審査委員会

|     |       |                        |
|-----|-------|------------------------|
| 委員長 | 川端香男里 | (財)川端康成記念会理事長 東京大学名誉教授 |
| 委員  | 井上章一  | 国際日本文化研究センター教授         |
|     | 奥田正叡  | 鷹峯常照寺 住職               |
|     | 坂上英彦  | 京都嵯峨芸術大教授              |
|     | 戸際達郎  | 成美大学学長                 |
|     | 西村明美  | 柊家女将                   |
|     | 浜田泰介  | 日本画家                   |
|     | 土居好江  | NPO 法人遊悠舎京すずめ理事長(五十音順) |

後援 京都府、京都市、京都商工会議所、京都新聞

協力 京都銀行、京福電鉄(嵐電)

賞品ご提供企業 愛染工房、嵐山祐斎亭、中源株式会社、柊家、松井酒造株式会社、松籟庵、浜田泰介画伯 (50音順)、



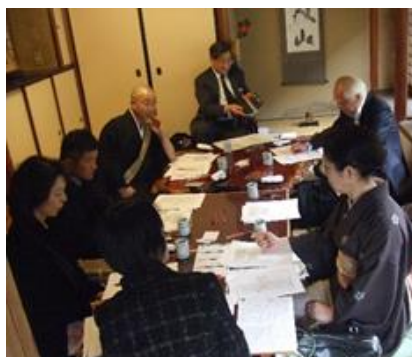
第一回京都への恋文の審査委員長講評 川端香男里氏

(川端康成記念会理事長 東京大学名誉教授)

2010年5月30日



第1回表彰式での川端審査委員長の基調講演と表彰式



第一回表彰式

第一回審査委員会の様子

「京都への恋文」は遊悠舎京すずめ創立10年目ということで行われた企画でございます。歴史と暮らしに根付いた京都の魅力につきましては、本日も新幹線で鎌倉から参ったのですが、多くの修学旅行生が訪れ、ここ嵐山に来る人も大変多く、日本人の京都好きということが分かるところであります。

歴史、時の流れのなかでどんどん煮詰められて、とろりとしたエキスが積み重なって、難しく言いますと重層的といいますか、京都の特徴というのは、先ほど見ましたオリベッティ社の映画にもありましたように、一部を切り取っても大変な奥深さがあることが、外国人にも分かるだろうと思われます。そのような、重層的な歴史的都市の積み重なるの魅力というのが、京都の魅力の中心になっているのではなかろうかと思ひます。

そういったことを踏まえて、見事に表現しているのが京都府知事賞の松島さんの作品でございます。プリントされているものをご覧ください。実は、860ものの中から作品を選ぶというのは大変な作業でございましたけれども、私がいうのも何ですが、審査員の先生方のご努力により、選ばれたものは的確であったと思われま

す。

つまり、時の流れの中でいろんなものが積み重なって、その結果、京都に残っているものが、いかに重層的であるかということがよくわかります。このことについては、佳作の上柳さんが良い例です。この方は京都在住の方でありますけれども、京都の魅力がどんなものがあるか列挙されている。圧倒されるほどのものがあるわけでございます。こういったものが京都府知事賞の松島さん、佳作の上柳さんの文章に見られます。

京都は京都の人だけでなく日本人全体の心の故郷といっても過言ではないと思います。また特徴的なのは、人生のある一時期のかぎりのような、あるいは出会いのようなもの、出会いの場所というものを京都が惜しげもなく提供してくれているということです。

先ほど、修学旅行生のことを言いましたが、多くの日本の中学、高校の生徒が、場合によっては大学のゼミなどもあるでしょうが、そういら経験をしている。そうということが京都市長賞の狩野さんの文章に、佳作の内川さんの文章にも典型的に見られていますが、他にも沢山見られました。

このコンクールの題に恋文という言葉が選ばれている。何だろうという風に思った方もいらっしゃるかもしれませんが、京都に対する愛着を恋になぞらえて比喩的に言ったことは大成功だったと思います。「京都への恋文」という発想は見事でした。つまり、恋としかいいようがない愛着というものが京都に対する心のなかにある。ですから、京都新聞賞の谷口さんの絵手紙がございますが、これは簡単な文章が書いてあります。絵がとても素晴らしいですけれども、「変わらない街があるから、変わっていく私がいる」と書かれています。何の変哲のない文章のようですが、物事のすべてが激しく変転する中で、京都は常に「恋人」として変らぬ存在であり、その支えによって私は変化し成長していくことが可能になるということが、的確に表現されています。こういう発想を生んだということからも、「京都への恋文」という表題は絶妙だ、秀逸だと自画自賛してしまったこととなりますが、ご理解頂けると幸いです。

歴史的都市京都の重層的な文化ということを申しましたが、京都では何事によ

らず、表だけではなく裏があり、それがまた奥深さを持っている。それで、ガイドブックに載っていないような知識だとか見方だとか、一人ひとりがもっていて、それを楽しみにする。

理事長賞をもらった俳句、そして審査委員長賞をもらった京都通の話とか、俳句、川柳から2つだけ選ばせて頂いたんですけども、京都のこのような重層の味を表している気がいたします。

最後の絵手紙の中で非常にきれいなお野菜をいっぱい描いてある、こういう絵手紙に、実に秀逸ものがあつたんですけど、なかなか全部を選びきれないのでこの2つを拾っただけになりましたが、全体を通してみますと、非常にこれが印象的、そして、またそれがよく分かるようなものであつたということです。

京すずめの方がお考えになっている京都が、京都らしくあり続けるための運動は、日本の危機、開発の危機に対するきわめて敏感な対応だと思えます。

京都は日本が世界に誇る世界遺産ではありますが、アテネのパルテノン神殿のような文化遺産とは全く異なります。パルテノン神殿は現在の生活や暮らしとは全く関係ない。文化遺産として残ってはいますが、過去と現在が断絶しています。生活のにおいがほとんど残っていない。ところが、京都では暮らしや生活が残っているのです。

川端康成の小説『古都』は外国では『kyoto』と訳されて、京都という都市のガイドブックのようにして読まれています。歴史がそのまま現在に生きている都市・京都への憧れの気持ちを誘うようであります。

「京都への恋文」という試みは、現在に生き続ける古都への関心を高める上で、大きな成果を上げたように思います。長くなりましたが、全体の講評を述べさせていただきます。

第一回京都への恋文 表彰式 式次第

2010年5月30日

於 嵐山 松籟庵

式次第

◎ 映画「京」上映(イタリア・オリベッティ社製作 30分)

京都の街の風物を捉えたドキュメンタリー映画で、イタリア・オリベッティ社が世界の文化交流を目的に、世界各国の美術館に寄贈した記録美術映画シリーズで、1969年の完成。制作・監督は市川崑氏、脚本は谷川俊太郎氏、音楽は武満徹氏、撮影は墨谷尚之氏、ナレーションは芥川比呂志氏、監修は丹下健三氏、亀倉雄策氏、石川忠氏等。元日本オリベッティ株式会社広報部長・板垣欣也氏より寄贈

◎ 表彰式

|          |       |                                |
|----------|-------|--------------------------------|
| 講評       | 審査委員長 | 川端香男里氏<br>(川端康成記念会理事長、東大名誉教授)  |
| 表彰       |       | 京都府知事賞、京都市長賞、京都新聞賞、佳作          |
| 欠席者の表彰披露 |       | 遊悠舎京すずめ理事長賞、審査委員長賞、佳作          |
| 入賞者スピーチ  |       | 松島徹様ご代読さなえ様、狩野彰一様<br>谷口麻衣様     |
| 入賞作品披露   |       | 知事賞、市長賞 栗塚 旭氏                  |
| 基調講演     |       | 川端香男里審査委員長 川端康成記念会理事長          |
| 懇親会      | 乾杯    | 浜田泰介先生                         |
|          | 来賓挨拶  | 京都府観光政策艦 松村明子様<br>京都市長 門川大作様代理 |
|          |       | 懇談、会食                          |
|          | 謝辞    | 遊悠舎京すずめ 理事長 土居好江               |

入賞作品

京都府知事賞

松蔭 徹 大阪府吹田市

私があなたに惹かれるのは、そこに神を畏れ、仏に祈りを捧げている人々が暮らしていて、だからきっと神がそこに鎮座され、仏が微笑んでおられると思えるからです。やはり、私にとってあなたの元に帰ることは“参拝”であり“巡礼”です。

でも、あなたは自分を「聖地」だなんて考えもしていません。人々が毎朝繰り返す営み、四季折々の祭りを「宗教」だとも感じていません。「聖地」だ「宗教」だなんてよそよそしい呼び方をしたら、きっとあなたははにかんで、「かんにんしてやあ」などと照れることでしょう。人々には「当たり前のことやないの」といわれるだけでしょう。それほど暮らしにとけ込んでいる（あるいは暮らしがとけ込んでいる）心のかたち。この国は、昔はどこでも神や仏は、山中深く、あるいは立派な聖堂に隠れておられるのではなく、路地の辻に、そして玄関に、台所に、いつも身近におられるものでした。

たとえば朝、ご飯一膳いただくこと。それがそのまま神や仏とともに暮らすこの国の宗教活動でした。そんな日本の心のかたちを、あなたは今も思い出させてくれる。そういえば、いまは遠い世界で暮らしておられる天皇陛下。堀や石垣のない御所に暮らしておられた頃は、人々と同じ空気を吸っておられました。

ただ神や仏を敬い祀ってくださっていただけなのに、東へ行かれたらご自身が神になられて…。ずいぶんご苦勞なことでしょう。だから、あなたはいまも、帰ってこられるのを待っているのですね。みかどご自身のために。また人々と神々と仏たち、ここで一緒に暮らそう、と。

～新年楽 平安楽土 万年春～

かつてあなたに捧げられた、祝いの歌。いまも変わらずこの歌を、心のかたちを守る人々が神々と、仏たちとともに詠っているまち。だから私も懐かしくて、嬉しくて、あなたの元にまた帰りたくなるのです。帰って、拜んで、心の形をとり戻して、元気になるのです。そういえば、また、そろそろ帰ろうかな。

京都市長賞

狩野彰一 神奈川県横浜市

京都よ。日本人の旅情をくすぐる代表者よ。そう、誰もが認めている。だが、僕はそんな君に素直になれない。そりゃあ君が、テレビに映れば、ほ一、いいな

あ、と思う。君が持つ懐の深さを感じ入る。だが、テレビで雑誌で、芸能人が、文化人が君を宣伝すればする程、僕はへそ曲がりの初老の男。電波にのった、この世に知れ渡った所へなんぞ行くか、といつも思っている。だから、僕が君の所へ立ち寄ったのは、六十年の人生でたったの数度。寂しい回数ではある。

だが、君を懐かしく思う気持では、僕もひけをとらない。中学の修学旅行。僕は新京極で、他校の生徒の波にのまれ、仲間を見失った。焦れば焦るほど、まわりは見慣れない景色になった。そんな僕を見かね、声をかけてくれたのが、地元の女子高生だった。彼女は僕の仲間探しに付き合ってくれた。あの時、ボ僕はどのくらい彼女と一緒にいたのだろうか。恐らく数分だったろう。めぎとい仲間に後頭部をはたかれ、我に返った時、彼女は雑踏の人になっていた。おめえ、何のためのカメラだよ！その夜、僕はさんさんに嘲られた。年上の女性の優しかったたずまい。初めて聞く京言葉。一睡もできなかった。次の日、僕はパシャパシャと無意味にシャッターを押し続けた。家族は現像された写真に首をかしげた。……京都よ。これが君の思い出だ。あれから45年。遥かな過去。30年連れ添った妻は京都とは何の縁もない。その妻を連れて、僕は新京極に立ってみようと思っている。残された時間はそんなに多くない。京都よ、もう君にへそを曲げている時間などないのだ。

京都新聞賞 絵手紙

谷口 麻衣 京都府京都市

変わらない街があるから、  
変わっていく私がいる。



遊悠舎京すずめ理事長賞  
鴨川の 夕日みたくて 京都旅

野田まりあ 愛知県刈谷市

審査委員長賞  
京都通 父がだんだん 偉く見え

池田 功 神奈川県川崎市

佳作  
前略

田中美恵子 大阪府大阪市

とにかかくにも大変お世話になりました。かれこれ三十年以上にもなります。その時の目的は思い出せませんが、中学生の時に一人で訪れて、その後も、恋の成就を祈ったり、失恋の痛みを癒したり……。

どちらかと言うと、京都へは哀しみを捨てるために行っていたように思います。でも弱った心を抱えて訪れるたびに、歴史の懐に擁かれて、回復を果たすことができました。

そして、生涯の伴侶との出会いの場も京都でした。だから、心をこめて言います。ありがとう。

佳作

内川 泰子 福岡県小郡市

初めて私が京都を訪れたのは、中学3年生の5月、修学旅行の時でした。記憶の埃をはたいてみれば、舞妓さんの可憐さに目を見張り、「おいでやす」などの独特の柔和な京言葉に触れて、15歳のみんなは大はしゃぎ。神社や仏閣をいくつか巡りました。中でも、記念写真の団体撮影をした新緑の清水寺はことに印象に残っています。

それから、53年経過した昨秋。夫と再び京都を旅しました。「哲学の道」「円山公園」等、初めての地も素敵なお所ばかり。

清水の舞台にも、53年振りに立ちました。昔のままの姿をとどめていて、一面に樹木が繁り、見事な紅葉に心を奪われました。「清水の舞台」。これまでの長い人生の中で、このフレーズが何度頭を過り、実際に飛び降りたことでしょう。

「また、来るからね」

そとつぶやいて、帰ってきました。

佳作

上柳 匡子

京都府京都市

京都生れ。京都市育ち。

東京に出ようと思ったこともあるけれど、  
やっぱり京都にいてよかった。

京都って、いつまでたっても旨味の出る魔法の酢昆布のよう。

山はあるし川はあるし、神社仏閣、博物館美術館や能舞台。

大学銭湯お神水。春は桜。秋紅葉。夏は川床、雪金閣。

華道の家元、お煎茶抹茶。老舗きんとん豆大福。

美味しいパン屋とイタメシおばんざいカフェ。

祇園花街舞妓に芸妓、京都南座能神楽。

六波念仏壬生狂言、祇園祭にお松明。

四条どんつき八坂と松尾、鶴飼船。

天神弘法、御所ウォーキング。

ずっと、京都にしよう。京都いちばん。

でしょ？

佳作

二瓶 博美

福島県二本松市

美しき 古都に継がれる 京ことば

佳作

箱崎 美月

神奈川県海老名市

はんなりが 私のサプリ 四季ごとに



佳作 絵手紙

宮野 和子 兵庫県西宮市



京野菜は やさしくて 甘いね

第一回応募作品

奥田信雄 京都府京都市

子どものころから

お寺の池でザリガニを採りました。坊さんにしかられた。仏様の前に並んで、お菓子を頂いた。坊さんが托鉢に来た。後ろに並んでついて行った。お婆さんが僕にも五円をくれた。

地蔵盆は子どもでいっぱい、坊さんが来てお経をあげた。むしろの上でおっちゃんして我慢した。あとで蒸したお芋さんをみんなで食べた。

遠足で行ったお寺でたくさんの外国人を見た。大きな人だった。子どもの頃の遊び場は、いつもお寺さんとお宮さん。今も、そのまま近くにある。そんな町・京都は私の愛する故郷。

子どもの頃から千年の都に暮らし、日々伝統に包まれている。今日、通りかかった古い町家に佇まいに思わず心奪われる。明日、今一度、学ばせてもらおう。今日、仕事の中で先人の熱い心を見た。明日は少しでも近づきたい。

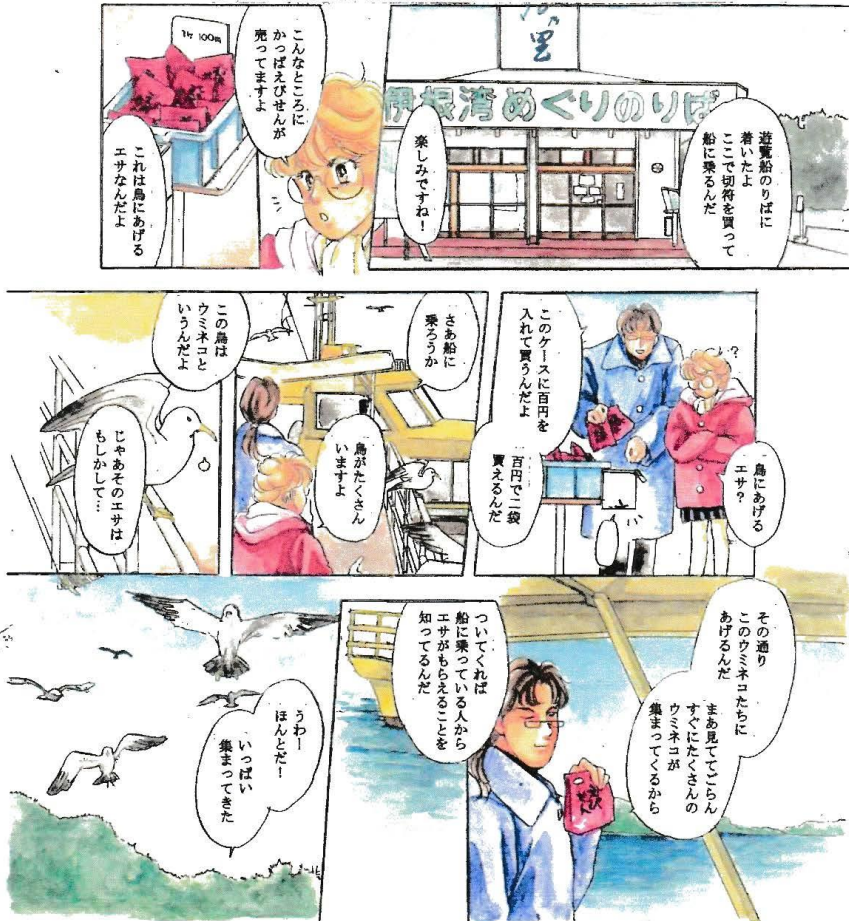
# ウミネコの舞う伊根の舟屋

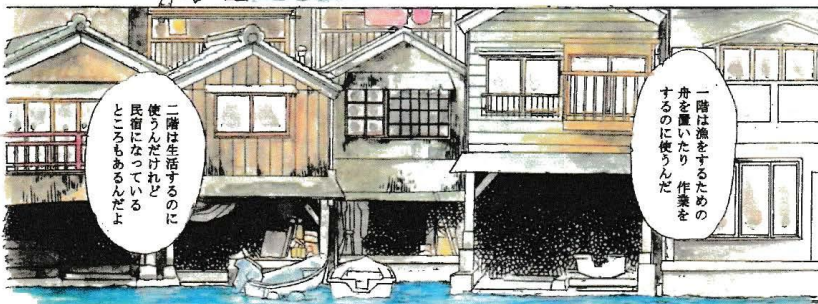
～伊根湾めぐり、舟屋、舟屋の里公園～

文：山口秀樹  
絵：やなぎ綾子

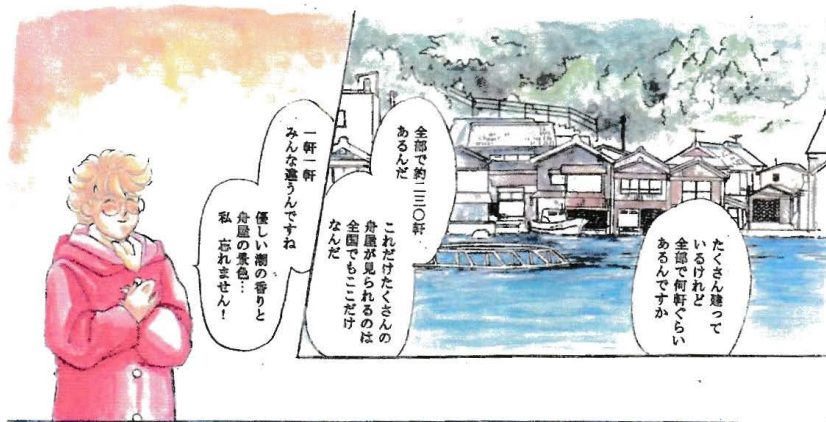
アクセス：舟屋の里公園は、JR山陰線福知山駅でKTR(北近畿丹後鉄道)に乗り換えて天橋立駅下車。  
天橋立駅から丹海交通バスの伊根方面行きで約50分伊根町役場前下車、そこから徒歩約15分。  
遊覧船のりばは、一つ手前の日出で下車。

問い合わせ：伊根町観光協会 TEL0772-32-0277 伊根湾めぐり遊覧船 TEL0772-42-0323









たくさん建っているけれど、全部で何軒ぐらいあるんですが、

全部で約三〇軒あるんだ

これだけたくさん舟屋が見られるのは全国でもここだけなんだ

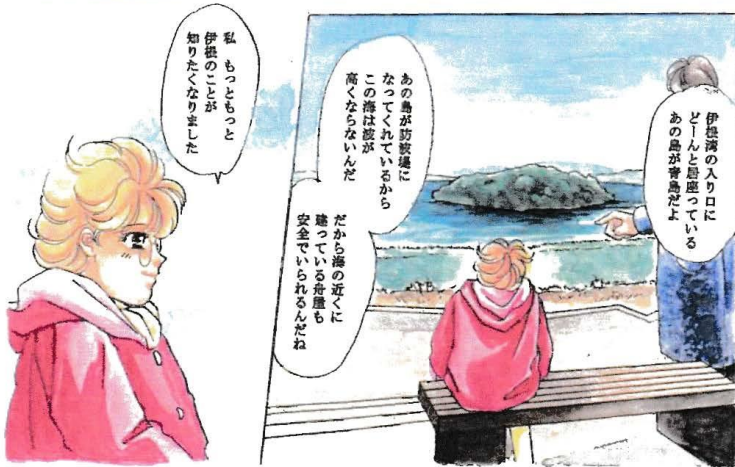
一軒一軒みんな違うんですね

優しい潮の香りと舟屋の景色...私、忘れません!



この舟屋の里公園からは、さつき遊覧船で見た伊勢湾が一望できるんだよ

うわ、ここから見る眺めもすてきですね



伊勢湾の入り口に、どーんと居座っているあの島が青島だよ

あの島が防波堤になつてくれているから、この海は波が高くないんだ

だから海の近くに建っている舟屋も安全でいらるんだね

私、もっともっと伊勢のことが知りたくなりました

## 4. 第二回京都への恋文

概要、講評、受賞作品

第二回京都への恋文公募期間：2012年8月1日～2013年1月15日

### 第二回「京都への恋文」審査委員会

|     |       |                          |
|-----|-------|--------------------------|
| 委員長 | 川端香男里 | (財)川端康成記念会理事長 東京大学名誉教授   |
| 委員  | 井上章一  | 国際日本文化研究センター教授           |
|     | 奥田正勲  | 鷹峯常照寺 住職                 |
|     | 小林芙蓉  | 書画家、嵐山松籟庵女将              |
|     | 坂上英彦  | 京都嵯峨芸術大教授                |
|     | 戸際達郎  | 成美大学学長                   |
|     | 西村明美  | 柊家女将                     |
|     | 浜田泰介  | 日本画家                     |
|     | 土居好江  | NPO 法人 遊悠舎京すずめ 理事長(五十音順) |

後援 京都府、京都市、京都商工会議所、京都新聞

協力 京都銀行、京福電鉄(嵐電)

賞品ご提供企業 愛染工房、嵐山祐斎亭、おぶぶ茶苑、中源株式会社、柊家、  
松井酒造株式会社、松籟庵、浜田泰介画伯 (五十音順)、

第二回京都への恋文審査委員長講評 川端香男里氏 2013年5月26日

まず自己紹介をしなければいけません。私は現在鎌倉に住んでおりますが、残念なことに鎌倉は今回、世界文化遺産には選ばれませんでした。今、残念と申し上げましたが、鎌倉市民はある意味では、ほっとしております。京都に対抗して「武家の古都」という看板をかかげましたが、古き「武家の」文化伝統が今の鎌倉にどれだけ残されているか、ということは大変疑問です。今は巨大都市東京の手っ取り早い観光・娯楽都市として賑わっておりますが、押し寄せる車や人の洪水で週末など大変な混雑ぶりです。もし文化遺産に登録されたら、富士山の騒ぎを見てわかりますように、どっと人が押し寄せて町全体の生活が崩壊しかねません。それほど鎌倉の生活基盤は脆弱です。そこで思いますのは、京都と鎌倉の違いということですね。京都の方が鎌倉よりずっと長い歴史をもっているという問題ではなくて、そこに住んでいる人々の意識が問題なのだと思います。鎌倉が世界遺産として認められるためのお手本は、まさに京都にあると思います。

ところで世界文化遺産の落第生である鎌倉の人間が、京都の市民が盛り立てている賞の審査委員長をしているというのはどういう事かと思われるかもしれませんが、実は一番不思議に思っているのは私自身ですが、この間のいきさつについては後ほどお話申し上げます。

川端康成の没後、多くの人々のご協力でも川端康成記念会という財団がつけられました。優れた短編小説を顕彰する川端康成文学賞の授与が中心の文化財団ですが、日本の文学の創作ならびに研究に対する力添えが出来ればという趣旨でつけられております。今年4月1日に公益法人になりましたので、国際的な貢献、鎌倉市の文化都市としての発展への寄与という方向も目指したいと考えております。

5年ほど前に大学を退職して以来、もっぱら川端財団の運営に携わっておりますが、専門としておりました比較文学・ロシア文学の領域ではまだ現役のつもりでおります。来月もNHKに頼まれて、トルストイの『戦争と平和』についての解説を担当しますので、改めてこの『戦争と平和』というあの膨大な作品を読み直してみました。これは長大な作品で、なかなか読み切れずに多くの人が挫折をしまわうようですが、それは読み方が悪いのであって、これほど面白い楽しい小説はないと私は思っております。この小説は1812年という年に焦点を合わせて

ロシアの歴史を描いています。ナポレオンの率いるヨーロッパ連合軍がロシアの国内に攻め入り、ついには首都モスクワが大火で全部燃えてしまうという悲劇にロシアは見舞われます。

退却に退却を重ねたロシアは結局ナポレオンの大軍に勝利するのですが、その勝った秘訣というのは、ロシア国民がお互いに優しさというものを持っていたということです。人と人が本当にその優しい感情で結ばれる、そこで国民がひとつになれて、その結果ナポレオンの軍隊を追い払うことができたという物語だという風に言い切れるように思えました。それと比べて今の日本の状況を考えますと、これはあの1812年のロシアよりもっと大変な危機に襲われつつあるのではないかとこのような気がします。で、そのような時に軍備的な対応を重視する人がいるかもしれませんが、やはり国民同士がお互いに優しくなるということが何より大切と思われれます。「京都への恋文」もそういった意味で、つまり国民が互いに優しさを取り戻すという意味では、非常に重要な仕事なのではないかと思えます。ちょっとこれは脱線しました。

「京都への恋文」を主宰する京すずめの土居好江さんとの出会いについてお話しておかねばなりません。これまで川端財団の仕事で「川端康成コレクション展」を京都で二回させていただきました。川端康成と親交のあった東山魁夷という大画家がおられますが、その東山さんに康成は「あなた是非、京都の今の姿をとどめるような、そういう作品を描いてください」と、かなり熱心をお願いしたんだそうであります。それで東山さんが描かれたのが、例の「京洛四季」ですね。これは京すずめの趣旨とも合う仕事だと私は思いますし、二人の芸術家が、いわばタッグを組んで戦後一時期、日本の文化のために色々尽くそうとしたという事は、やはり現在私がやっております財団法人の仕事としても非常に重要という風に考えております。「コレクション展」を始めて、現在20年になりますが、その過程で東山魁夷さんが同時に大変なコレクターであったということが判明いたしました。そのコレクションが一度も公開された事がないものですから、川端康成と東山魁夷のジョイントコレクション展というのを現在展開中であります。

京都で開催した二度の「コレクション展」の際に講演する機会がありましたが、しばらくして遊悠舎京すずめの土居さんから「川端康成と京都」というような話をしてくれないかという依頼をいただきました。京都には当年106歳になる叔父もおり、友人もいて、現役教師だったころには学会でよく訪れる京都は何か身内のような感じをもっていました。土居さんとお付き合いしていると、より奥深い京都

の中に引きこまれて行くような気がしました。「京都への恋文」の審査委員長を引き受けるまでに話が進んで行った経緯は私自身にもよく分かりません。何かに魅せられたように自然の成り行きでそうなったとしか言いようがありません。

「京都への恋文」—この発想は実に見事です。恋文とは思いの丈を語るものだと、どなたもお考えでありましょうけれども、しかしただこの「恋文」には制限があります。ハガキ一枚に入る、という事が条件です。思いの丈と言ってもどンドン喋りまくられ書きまくられては逆効果になります。日本の場合は短い文で自分の気持ちを伝えるという伝統的な文化があって、中学生や高校生もしっかりとその伝統を身に着けています。先ほど京都府知事賞を受賞された鈴木さんが、初めてお書きになったというけど、これはもう血の中に流れている伝統なのでしょう。こういうものを書けるのが日本人なんですね。日本の短詩形を、外国人に説明する時に、例えば芭蕉の一句を説明しますと、学生はキョトンとして、それからどうしたの？という表情を見せます。「古池や～」と一句を説明して、それで終わっちゃうとそれで作品が終わるといことが彼らには理解できないのです。このように多くのものを削ぎ落とし切りつめて表現するのが、日本文化の非常に大きな特徴でしょう。

「京都への恋文」の応募作品の中には、今言ったような日本人の血の中に流れているものが、全て表れているように思われます。日本人が伝統的に持ち続けた切り詰めた表現の強みは、それが具体的であると同時に非常に象徴的である点にあります。言葉の持っている喚起力、なにかを呼び出す力が非常に強いのです。例えばここにアランダムに取り上げますと、例えば15歳の高校生の方がお書きになった京都新聞社賞の作品ですね、「打水や 石のかをりの やはらかさ」これ外国人が聴いてもわからないですよ、絶対わからないと思います。15歳の歌とは思えないですよ。

これはやはり教育の力もあるけれども、教育以前に伝統的に日本人の血の中に流れているものがあるのではないかと思います。その精神は音数律で切っているわけではない普通の文章にも見事に表れています。中でも京都市長賞の五十嵐さんの文章には感銘を受けました。

絵手紙に関しましては、八百何十通ともなりますと、整理するのが大変な仕事になります。京すずめの方々の大変な努力できちんと整理されて、審査委員のほうに廻ってくるわけです。絵手紙の愛好者は今や大変な数を数えるようになりました。絵手紙は絵と言葉の両面から成っていて、言葉を主体とする文章、俳



句、短歌などとは違った選考基準を審査委員側が考えなければならなくなります。

絵手紙のデータは事務方の方でいろいろと審議され整理された後で、我々の方に廻ってくるのでありますけれども、審査委員の予備的投票をまとめてもらいませしても、票がまとまらず皆が2、3票ずつとるといふ拡散した状態になってしまいます。本当に意思がばらばらなんです。ところがこれが不思議なところで、実際に審査委員が集まって、現物を目の前にして色々議論し始めると、何故か不思議にまとまってくる。

なんでそういう事が起きるのか、つまり一人一人がばらばらに独立して評価をすると、まとまった結果が何も得られないのに、集まって、話し合いをしようとして、何か別の神様がいて、それが降りてきて皆にとり憑いて話が決まる、まあ、そういうような感じで落ち着くのです。という事はつまり私自身委員長として何もリードしていないのですが、神様がやってきて雰囲気をもとめてくれるという、そういった印象であります。

これは私の個人的印象に過ぎませんが、いろいろな立場の人が一堂に会するということが大切なのです。それも議論をして投票で決着をつけるためというのは論外のことで、賞の選考は優劣という基準をつけるということで、そういうことに違和感を覚える人もいるでしょうが、いい作品を優れていると一同で認知した後の気分は格別です。私たちの賞の審査は、私が鎌倉からひょっこり出てくるということもあって、しょっちゅう会うというわけにはいきませんが、その前に事務方で、しっかりと議論を重ねて整理をして、あらかじめしっかりとしたアンケートを審査委員が出して、その上で最終審査をやる、という手順を守っています。そこで、神様が降りてきて、なんとなしに一番いいものはこれじゃないか、と囁いてくれるんですね。おかげさまでなんとか2回の山場を越したかと思いますが、今度は皆様の賞に対する評価を私達としては聴きたいと思っております。



第2回京都への恋文表彰式での書画

第2回京都への恋文審査委員会の様子 家小林芙蓉氏による書画奉納実演  
第二回京都への恋文表彰式

日時:2013年5月26日午後1時30分~3時

場所:若宮八幡宮社務所 東山五条西入 電話 075-561-1261

式次第

|        |                         |      |
|--------|-------------------------|------|
| 主催者挨拶  | 「京都への恋文」(佟正也作曲)記念 CD 紹介 | 土居好江 |
| 御来賓挨拶  | 京都市長 門川大作様              |      |
| 表彰     |                         |      |
| 入賞者挨拶  | 京都府知事賞 鈴木邦義様            |      |
| 講評     | 川端香男里審査委員長              |      |
| 入賞作品朗読 | 栗塚 旭                    |      |
| 書画奉納実演 | 小林芙蓉先生                  |      |
| 閉会の挨拶  | 祝賀会&懇親会                 |      |

京都府知事賞 鈴木邦義 神奈川県横須賀市  
都には あまねき人の 平安を 祈る僧尼の ころも満ちたり

京都市長賞 五十嵐 裕治 茨城県那珂郡  
細くたおやかな指先が頬に触れなんと、瞑想の美を現出する広隆寺の半跏思惟像。

私の京都は、その美しく繊細な指先に凝縮されている。それは、京都に残るあらゆる文化に共通する「こまやかさ」の象徴である。

西陣織、友禅染、京焼などの伝統工芸は言うに及ばず、かな書、京菓子、京料理と、「細やかな」指先が生み出す芸術は枚挙に暇が無い。

それらの根底にあるのは、しだれ桜、鴨川の流れ、嵯峨野の紅葉、北山の雪といった四季の景物と、その美を賞賛し楽しもうとする京都人の「濃やか」な感性であり、それは争いを避け相手を気遣う京言葉にも、頬に触れなんと留まる菩薩像の心となって現れている。

こうした二つの「こまやかさ」が一体となって生み出す京の心が、私の思い描くはんなりとした京都を形作っているのだろう。

京都、その地への思いは隔たるほどに憧れとなって降り積もる。それで私は近頃、無性に京都の繊細な美と心に会いたいと思うのだ。

京都新聞賞

白石 沙織 高校生 愛媛県伊予郡

打水や 石のかをりの やはらかさ

遊悠舎京すずめ理事長賞 I (2点) 秋山瑞葉 香川県仲多度郡

厳冬の京都、錦市場にて。私は半開きの小銭入れを持ち漫ろ歩いていた。香ばしい焼穴子につやつやのお結び。錦市場はいつも私を移り気にさせる。

その時、前を見ず歩いていたせいで通行人と衝突した。辺りに大量の小銭が撒ける音。これは大変だぞ、と冷や汗をかく前におばちゃんの声が響いた。

「皆よけて！この方小銭落としはった！」

そう言っておばちゃん自ら腰をかがめ小銭をかき集めてくれる。道行く方も手伝ってくださり、一瞬で私の手元に小銭が戻った。

「良かったなあ。さあこれでも食べな」

礼を言う前に、掌に漬物が乗せられる。おばちゃんはすぐ傍の店舗の漬物屋さんだったのだ。頂いた千枚漬は、京都の冬のようにきりっと冷たく、おばちゃんのように優しい味がした。

私はありったけの小銭で千枚漬を購入した。おばちゃんは飛び跳ねんばかりに喜んでくれた。懐は寒くなったけれど、その分心はとても暖かかった。私の、大切な京都の思い出の一つである。

遊悠舎京すずめ理事長賞Ⅱ  
理事長賞 Ⅱ

杉山 楓 短大生 岐阜県 岐阜市



審査委員長賞

黒木 直行 宮崎県日向市

兄妹で 父のズボンの ベルト持ち 清水寺の 坂道のぼる

特別賞作品Ⅰ

濱野 玲子 大阪府吹田市

東山にある女学校へは市電で通い、授業ではシューベルトの「菩提樹」を習った。当時ウィーンはドイツの一部で、日本とドイツは同盟国だから「菩提樹」は歌ってもよいのだ、と先生が言った。学校の帰りに時々寄り道をしては京極へ行き、映画をみた。しかし戦争が激しくなると学校へは行かず、勤労働員で三菱に行った。工場では、左手親指の先が機械に巻き込まれ、二つに割れた。

空襲警報が鳴ると、飼い猫のタマがいなくなる。が、解除されると、かまどの中からくしゃみをしながら出てきて、家人の顔を見ては嬉しそうにニャオンと鳴いた。黒猫のタマが灰をかぶり、白猫になっていた。外に出てみると南西の空が真っ赤に燃えていて、近所の人たちがそれを見ながら口々に、「大阪がやられている。かわいそうに。」と言いつつ、しばらくすると、決まって京都にも雨が降るのだった。

た。

娘だった母を慈しんでくれた京都。今の母にはこんな京都の記憶のみが鮮明である。

### 特別賞作品Ⅱ

小川量香 中学生 宮城県仙台市



舞妓はんの下駄。そしてまわりにある花は着物の柄をイメージして描きました。

### 佳作Ⅰ（5点）

谷口 早苗 兵庫県宝塚市

私が小学生だった50年前の夏の京都。祇園祭も終わり、五山の送り火を共に  
お精霊さんもお送りし、地蔵盆では、大きな数珠回しをしてお菓子ももらって、近  
所の友達と遊ぶ…。こんな行事が過ぎていくと共に、京都の暑い夏も終わって  
いくのです。

お祭りの始まるまえには、畳の上には網代が敷かれ簀戸、御簾、そして蚊帳、  
子供の頃には、これらがすごうれしくて、浴衣を着てよく寝ころがったものです。

近所のおまんやさんで、わらびもちや、おしんこを買ってきて、家の中の井戸  
にはスイカを丸ごと冷やし玄関先、坪庭には打ち水をして、家中、開け放して風  
を通す。

なつかしい風景がよみがえってきます。

暑いのが、あたり前の夏。

「家の造りは夏を旨とすべし」と兼好さんも言っているように、京都の夏には先人の知恵がつまっていました。

どんなに便利な世の中になろうとも、自然を暮らしの中にとり入れてきた京都を忘れることは、ありません。

## 佳作Ⅱ

後藤 ゆうひ 中学生 秋田県横手市

余震やさかい気いつけてなあ

久しぶりの震度5に日本中が揺れた日。祇園のおかあさん(大親友と呼んでと言われている)康子さんから電話があった。

「これは東日本大地震の余震やさかい。大正大震災の時も10年は続いたし、あまり怖がらんと、でも用心してお気張りやす」

大親友・康子さんの本当の年齢はわからない。

私は新撰組が好きで、池田屋跡を見たいと言ったら

「血のりは掃除しても取れないし臭いし怖いしホンマ迷惑なこっちゃ」

と、まるでそこにいたかのように話して下さったことがある。

そういえば、都をどりに案内して下さったときも、馬券売り場に群がるくわえタバコの人たちを見て

「みんなしてお金出し合うとかして別のトコ行ってもらえばよかったんや。本気で祇園を守っとけばこんなことにならへんかった」

と悲しそうな顔をされた。

守るものが日本一多い京都だから、住んでいる人ができないなら、私たち外にいる人間が助けなきゃ。

## 佳作Ⅲ

野田美和子 愛知県刈谷市

アルバムに 京のお宿の 簞袋

## 佳作Ⅳ

大窪誠一郎 兵庫県神戸市

しんしんと 雪降る古刹の 門前に 重き笠着る 雲水一人

佳作V

小野寺 夏希

高校生 岩手県奥州市



## 5. 第三回京都への恋文

概要、講評、受賞作品

第三回京都への恋文公募期間：2019年3月1日～2019年8月31日

第三回「京都への恋文」審査委員会

|     |      |                      |
|-----|------|----------------------|
| 委員長 | 井上章一 | 国際日本文化研究センター所長       |
| 委員  | 奥田正勲 | 鷹峯常照寺 住職             |
|     | 門川大作 | 京都市長                 |
|     | 小林芙蓉 | 書画家、嵐山松籟庵女将          |
|     | 西村明美 | 柊家女将                 |
|     | 西脇隆俊 | 京都府知事                |
|     | 浜田泰介 | 日本画家                 |
|     | 土居好江 | 京すずめ文化観光研究所理事長(五十音順) |



### 第三回「京都への恋文」審査委員長講評

第三回京都への恋文審査委員長 井上章一

国際日本文化研究センター所長

京すずめ文化観光研究所顧問



今、京都は、いや日本中、そして世界中がコロナという感染症におびえています。ウィズ・コロナとよびかけられていますが、ウイルスとのつきあいかたはわかりません。京都への観光もひえこみました。「京都への恋文」が、心おきなくたのしめる状況では、正直に言ってないでしょう。

京都新聞賞にえらばれた宮野さんは着物の街として、京都をえがいてくれました。「市長も着物」で仕事をする街であることを、とりあげておられます。ですが、その市長も感染の拡大以後は、和服をひかえだしました。スーツにネクタイというビジネス・スタイルで市政へむきあっています。京都じしんに京都らしくあろうとするゆとりが、なくなりだしたのかもしれない。

ですが、そんな御時世だからこそ、みなさんの、応募者各位の作品が目にしみました。ああ、ほんのすこし前までは、これが京都の姿だったなあ。こういうことが語られる街だったなあと、かみしめています。

私じしんは「京都ぎらい」を標榜してまいりました。ですが、感染拡大後の京都をあげつらう気になれません。以前は京都らしさが健在だったからこそ、にくまれ愚痴もたたいてきたのだと思います、逆に今は「京都への恋文」が、わだかまりなくあじわえます。審査にあたったのはコロナ以前でした。その当時はいだけなかった感想もこめて、この講評をつづります。ご容赦ください。

京都府知事賞の長谷川さんは、「どんだん」の話を書いてくださいました。そう、あのころは往来で焚き火に、人の輪ができたんですね。わたしにも、記憶はあります。「どんだん」という響きも、耳のどこかにのこっています。でも、今は京都のみならず、どこでも焚き火ができなくなりました。

「焚き火だ、焚き火、落ち葉焚き……」の唄も、まあ御蔵入りでしょう。大気中のダイオキシン濃度を高める、とか言ってね。



今、読むと、ウイズ・コロナの対応をせまられる状況と、イメージがかさなります。だからこそ、よけいに愛惜の想いが高まりました。長谷川さんも、いくつかの像をおりこんでられます。「どんどん」から、人がだんだんはなれていく。焚き火のできた時代がすぎさった。御じしんも、京都から遠ざかっている……。いい文章をまとめて下さったと思います。

「京都に何がある」の。「京都には、京都がある。京都市長賞の鎌田さんはそんなおばあさんの言葉を紹介してくれました。おっしゃるとおりです。そういう言いかたでしかあらわせない何かが、たしかにあるのですね。のみならず、自らを投影できるところが、たくさんあることもしまされました。すばらしい「恋文」だと思います。

鈴木さんは審査委員長賞ですが、批判的な指摘もよせてくださいました。「恋文」では、相手ににおもねらない的をいた言葉も、胸を打つものです。ただ、現在では京都タワーより京都駅舎のほうが目ざわりになっているかなとも思いました。

京都新聞賞の宮野さんには味のある絵をとどけていただき、ありがたく思っています。着物の街を語るいっぽうで、絵柄にはこっぼりの履き物をとりあげられました。ほどよく、意表をつかれましたね。

京すずめ文化観光理事長賞をとられたのは谷口さんです。京都のなつかしいならわしやくらしぶりに、光をあてられました。焚き火の一本にしばられた知事賞のかたとくらべれば、印象は弱くなったかもしれませ。私は愛宕さんの護符に想い入れもあるのですが……。

表彰式中止の為、4月中旬に各表彰者に表彰状と副賞を郵送

後援 京都府、京都市、京都商工会議所、京都新聞、国際交流基金京都支部  
京福電鉄(嵐電)

協力 京都銀行、愛染工房

賞品ご提供企業 愛染工房、雲楽窯、おぶぶ茶苑 (50音順)、

京都府知事賞

長谷川昌孝(はせがわ まさたか)神奈川県横浜市

どんどん

昔、京都では焚火のことを「どんどん」と言った。比叡降しと底冷えのする朝には、藁を焼いてその「どんどん」があちこちで始まった。町内の人が一人二人と集まり「おはようさん！ 今日寒おますなー」それぞれ炎を見、炎に手をあてながら談笑。「どんどん」の炎が勢いよく燃え上がる頃、いつの間にか大きな人の輪が出来ていた。炎も下火になって、必ず誰かが挨拶。

「あー温かった。おおきに、ええ、藁灰ができましたな！」 「へー、おおきに！」

火が残る藁灰を主人がスコップで掬う、

「おきばりやっしゃ」「ほな、なー」

お互い声かけ合いながら、それぞれ消えゆく街の人。

冷たく悴んだ手を急に温め、痛い手に顔をしかめた、懐かしい幼少。昔、昔のお話。どんどん燃える焚き火に人は集まり、消えた焚き火に人は三々五々消え去る。

消え去って早や半世紀。歳月と共にどんどん燃える。

故郷への想い。おおきに！の響きが心地よい。

人の情けが温い。愛しき哉京都。

京都市長賞

鎌田吉仁 大阪府枚方市

京都に何があるん

「京都に何があるん」

私が祖母にたずねると、いつも決まって

「京都にはなあ、京都があんねん。」

と答えた祖母。朝から清水さんを詣で、週末には大丸へ買い物、初詣は八坂さんから平安神社。宇治も嵐山も北山も、京都をこよなく愛していた。「いつ行っても顔が違う。せやのに、千年以上前から同じ顔してる。」

そう言う祖母の顔は、いつも笑顔で、ああ、京都とデートしててんなあ。

あれから30年。私も、私のお気に入りの京都を見つけた。その空気を感じに、一人つぶやく。

「そうだ、京都に行こう。」

### 審査委員長賞

鈴木邦義 神奈川県横須賀市

千二百年の古都でありながら、古今が『調和』している京都。訪れる人々は皆、その『調和』に魅了されることでしょう。しかし、文化庁の京都移転が決まり、文化観光都市・京都の更なる昇華が期待される一方、近年徐々に『調和の乱れ』も…。その懸念は、京都をこよなく愛した川端康成が知己の東山魁夷に「京都が失われない内に描いてください」と言葉からも窺えます。

さて、京都ファンの私が許し難いのは、京都タワーと賀茂川の亀形の飛石。曾て、フランスのミッテラン大統領が京都タワーを遠望し「京都には必要の無いものですね」と苦言を呈されたのは流石に慧眼です。東京タワーやスカイツリーとは「場」が違うのです。又、あの飛石は平安神宮の蒼龍池の趣ある飛石とは対極で、京を流れる川の風致を汚しています。京都の官民の方々には、斯様な禍根を残すようなことの無いよう、諸計画の判断基準を古今の『調和』において頂きたいと、切に思うのです。

### 京都新聞賞

宮野和子 京都府京都市



### 京すずめ文化観光研究所理事長賞

谷口早苗 兵庫県宝塚市

私が子供だった 60 年前の師走の京都。神棚・仏壇掃除から始まり、畳をあげ、近所一斉の煤払い。そして門掃き。おくどさん。井戸神さんの一年の感謝と年神さんの準備。大小の鏡餅。愛宕さんの護符。玄関両側に根引きの松としめ飾

り…。思い出すと、懐かしさで一杯になります。四季折々に当たり前に行事があり、それが生活にとけこんでいる京都。その京都を離れて数十年。年を重ねての今～その当たり前にしてきた事が、長い間、地域に根ざし続けてきた事も考えると、一つ一つが私の心の琴線にふれ、涙が滲みます。

文化庁の移転も、さもありなんと納得。「京都の人はいけず、一見はんお断り、ぶぶ漬けでも…」とマイナスイメージで評されますが、千年の都ならではの都人の智恵から生じたおもてなしの裏返しの文化ではないかと考えます。せわしない、いらちでやすげないと言われたいよう、たおやかに、はんなりと生きていけたら…と思っています。



大学の教養課程では哲学を採ろうと思った。たまたま神戸で軟式テニスの大学対抗戦があり、一年生ながら補欠で遠征に連れて行ってもらえることになった。その機会に哲学の教授に紹介状をいただいて妙心寺寿聖院月心老人をお尋ねした。

お茶をご馳走になり、お暇するときに「書」を一枚いただいた。転勤族の引越時に際しても大切に持って歩いた記念の「書」は、喜寿の年にやっと表装することができた。そして平成31年、傘寿の年の床の間に飾った書が曾孫の誕生を見守った。家宝の「書」、私の京都への思いの原点である。

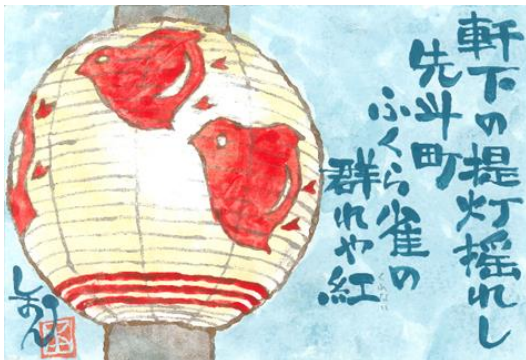
某月15日、伏見油掛の電停に佇む男。  
 八「ちつとも電車来ねえぢやないか」  
 熊「お前さん、知らねえのかよう。」  
 けふはお休みの日なんだぜ。おい  
 八「えつ、電車に定休日があるんだ」  
 明治28年當時は蹴上の疎水発電所から電力を得てゐたため、1日と15日は点検のため電車は走れなかつた。暢びりとした古き佳き時代の話だ。

第三回応募作品

天野正 神奈川県横浜市

第一回応募作品

町田暢人 神奈川県川崎市



第一回応募作品 本田しおん 東京都武蔵野市

## 6. 「京都への恋文」に寄せて

立命館アジア太平洋大学 教授 田原洋樹

わたしが立命館アジア太平洋大学(大分県別府市)で担当する「アジア太平洋の言語」という科目では、アジア太平洋地域の言語を素材にして、言葉のしくみを概説することと合わせて、エッセイを書きながら、言葉で表現する楽しみに覚醒させることを目標としています。そんななか、京都についてのエッセイを募集するという情報があり、いくつか設定した課題のひとつにこの「京都への恋文」を取り上げました。

「今回の出来事を通じて、わたしが感じたことは以下の点です。

### (1) 京都ブランドの圧倒的迫力

「京都を知らない人間はいない」を再認識しました。こんなに力がある地名、日本には京都以外にないでしょう。言葉遊びのようで恐縮ですが「力は地から」です。「京都」という土地そのものに力があることを痛感しました。

### (2) 「知っているだけ」の存在の多さ

左程のブランド力ですから、一度も足を運ばなくても、ある程度の知識や認識を容易に持つことができます。したがって「知っているだけ」で、実際に京都へ体を運び、京の水を飲んだことのない人間が相当数いるはずです。京都の観光地としての潜在力(下世話な言い方をすれば「集客力」)は、われわれの想像以上ではないか、と考えます。たとえば、実際に湯葉を食べたことがある人だって、少ないはずです。それもお刺身で食べられるような京湯葉となれば、知識としては知っていても、その舌触り、柔らかな味わいを自分で体験した人は限定されるのではないのでしょうか。

無名の観光地なら「知っているだけ」の人はいないでしょうが、京都のように「世界級の地名」となると「知っているだけ」の人をそのまま放置しておくのは、あまりに「もったいない」気がしてしまいます。

### (3) 「京都は必修科目」

日本に来る留学生にも、海外に学びに出る日本人学生にも、「京都経験」を強く勧めたいですね。文部科学省は「日本人学生が内向きになっている、自信がない」、そして「それは語学力の欠如だ」と表層的な理解に終始して、きわめて対処療法的に英語教育を推進していますが、「自分に自信がない」のは英語の勉強だけでは如何ともしがたいわけです。京都を経験し、自分たちの文化を再確

認する、それにより(京都以外の)自分の出身地や郷里の文化や歴史にもあらたな気持ちで触れなおす、こういうアプローチで日本人学生に「自信を持たせる」ことも可能ではないかと考えています。「京都は日本の必修科目」のような打ち出しを考えてみたいものですね。

プレマ株式会社 代表取締役社長 中川信男

京都で生まれ育って、はや50年。気がつけば人生の折り返し地点も過ぎてしまい、この街について知らないことの多さに圧倒され、だからこそ先人たちは子々孫々にまで亘ってここで何かを成すことに夢を馳せたのだろうか。

私の本職は「食」。とはいえ、調理をすることではなく、あくまで流通のところで事業を行ってきた。今でこそ言えば理解も共感もされるオーガニックや有機栽培の農産物を原材料とし、時間をかけて育てられた発酵食品やそれにまつわる品をお客様に提供することで会社は順調に成長してきた。しかし、世間一般が思うほどこれらの評価は高くはなく、実際にその基準となる業界全体の流通高は決して増えてはおらず、なおかつ業界全体は元気がない。超大手に吸収された同業者たちも、親会社からの期待に応えられたところはなく、結果的に失望を買って、どんどん親会社が変わっていく。先進諸国に限らず、アジア各国に至るまで、日本以外でこの仕事を行っていれば急成長産業にいることになるが、あいにくこの国では「良さそうに見えるもの」が売れるだけであって、「ほんとうに良いもの」が売れるわけではないのだ。京都の土産物を手にして裏の小さな文字で書かれた原材料欄を読めば、私はむしろ買う気が失せる。表書きやパッケージは立派でも、自分の愛する人に食べさせたくないもので私は利益を得る気は全くない。仕事だからという言い訳が重なって食の本質は貧相になり、「豊かな食卓」の影で自然破壊が止まる気配がないのは当然の結果といえるだろう。

そんな私が、この職人の街でもあるここで取り組んだことは、ジェラートをはじめとする製菓だった。イタリアでは、食と農は密接な関係があり、彼らの高いプライドと同時に実態も伴ったものが多く、これは誰の何からできているかということに関心が高い。極めて合理的に物事を考え教える彼らのレクチャーを受けるうちに、動物の命や命を繋ぐ乳などを奪わなくても、有害な食品添加物を使わなくてもよい選択肢が脳内を駆け巡った。彼らがそれを教えているのではなく、私の仕事を通じて得た知識とカチカチと噛み合う音がして、帰国後すぐにアウトプットし

た。その結果がイタリア本国でのジェラート国際コンテストでの前人未踏とされる3年連続受賞であり、さまざまな理由で食べ物に制限がある人がたくさん店に来て下さる光景だった。コロナ渦において、確かに人は出歩けなくなった分、食の選択に敏感になる人が増えて、通販の受注高も順調に推移、私たちの仕事は、行動制限と健康上の危機において役立つことが証明されつつある。あれほど世界中から私たちを目指してやってきた食に制限をもつ外国人の姿は見るのがなくなった寂しさに浸る暇もなく、命のあるものを食べないと、命を繋ぐことすらできないことを知る人がじわじわと増えている。

人と人のあいだに、無数のバリアが張り巡らされ、微生物たちは無残にもウイルスたちと一絡げに殺菌されてしまう。幼い子どもたちが、生きていくためには必要なことだと教えられ、友達と距離をととり、マスクをして、殺菌に励む。専門家によればそれは正しいことのようにあるけれど、専門家は常に正しかっただろうか。遺伝子組み換えは無害であり、科学的でないと、それに異を唱える者を非科学的だと罵る声の一方で、命を支えようとする人たちは食の欺瞞に静かな抗議をしている。つまり私たちから買おうとしてくれるのだ。決して多くはないけれど、やっぱり何かが違うと感じている人は確実に増えている。

京都は、ときに少数者に厳しい街であった。しかし、少数者を大切にしようとする人たちもまた、ここで確実に反骨の精神を見せつける。私はそういう長いものに巻かれようとならない美学をここで学び、それをより高度に複雑にしようとしている。ファッションにも余念のない若い男女にもまた、ほんもののおいしさを伝えること。フェイクならでは、脳を直撃する味覚に満足する人を、少ししかない、じわっとくる「ほんまもん」にたなびいて、やってくるように。ここにしかない何かを創り出す。それが、私の京都への少数者としての情熱である。

会社役員 大坪正典(筆名: 柊正也)

「京すずめ」創立20周年記念誌に寄せて

このたび、一般社団法人京すずめ文化観光研究所が創立20周年を迎えられ、記念事業の一環として記念誌が発行されますことを心よりお祝い申し上げますとともに、この記念事業を企画されたご関係者の皆様に対しまして、深く敬意を表します。

一口に、20年と申しますが、今日のようにいろいろな情勢が変転きわまりない

世の中に、一つの団体が成長し続け、京都の伝統文化芸能を世界中に発信し続けていることは、ひとえに土居理事長をはじめ、会員の皆様方の並々ならぬご努力とご尽力の成果と信じて止みません。

さて、土居理事長とのご縁ですが、思い起こせば、2009年の初夏、八坂通り沿いに居を構えられる方が送って下さいました書籍と一緒に同封されていた京都新聞を何気に見ましたことから始まりました。

そして、直ぐに「京都への恋文」の紹介記事が目にとまり、「遊悠舎京すずめ」主宰者の土居理事長のお写真と記事を拝見したことが、京すずめを知る切っ掛けとなりました。

京都新聞の掲載記事やホームページ等で京すずめの活動や情報発信に共感を覚え、私から連絡を取り土居理事長と面会させていただき、何度も意見交換の場を作っていただきました。

土井理事長は、それこそ英明果敢で八面六臂のご活躍の日々にも関わらず、周囲への心配りも欠かさず、その一挙三反な行動や詠雪之才にすっかり感心してしまいました。

私にとって特に思い出深い企画として、2011年の9月、成美大学との共同企画で、東日本大震災のために結婚式を挙げられなかったカップルを京都にご招待して結婚式を行い、その翌日に新婚旅行にご招待する「風のチャペルプロジェクト・ハネムーン」に参加できたことです。3組のカップルと会員の皆様方と一緒に古都の名刹、名勝の地を巡るハネムーンの後には、中源株式会社代表取締役中田治様のご好意で、「東北新生希望の木」「新婚カップルの木」「風のチャペルプロジェクトの木」植樹という大きなイベントがありました。私は「風のチャペルプロジェクト・ハネムーン」の記録写真を映像化させていただく機会を得て、オリジナルイメージソングとして「遊悠」と「古都に燃ゆ」を手掛けリリースすることができました。

また、第2回「京都への恋文」では、イメージソング「恋文」を手掛けることになり、土居理事長と京すずめとの出逢いによって、とても素敵なお縁を沢山いただきましたことが、とても嬉しく感謝の念に堪えません。

結びとなりますが、京すずめ創立 20 年を期にますますのご発展と会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



パナソニック株式会社  
アプライアンス社 アプライアンスデザインセンター  
ソリューションデザイン部 部長 木原岳彦

「京都への恋文」総集編冊子のご発行、誠におめでとうございます。

これまでの「恋文」を拝読させていただき、日本全国から、中学生から70代のご年配の方まで幅広い年齢層の方々が、文章や俳句、川柳、絵手紙など様々な表現手法で京都への「恋文」をととても豊かに表現されており、改めて、京都は日本人の心の象徴であることを実感しました。

弊社は2018年より滋賀と大阪に分散していた家電のデザイン拠点を京都に集約しました。

京都を選んだ理由はグローバルな文化発信都市であることです。私ども日本の企業として、グローバルを見据えて自らのアイデンティティを発信していくうえで、日本の文化の中心であり、伝統とイノベーションを同時に育んできた京都に学ぶことが多々あると思っています。

今後とも京都に根差し、文化に触れ、学びながら、京都のさらなる発展に微力ではありますが貢献できれば幸いです。

最後に、京すずめ文化観光研究所様の今後ますますのご活躍を心からお祈り申し上げます。

# 二部

京すずめのあゆみ



玉置半兵衛氏所蔵 江戸時代の「京雀」



京すずめ保有の商標「菩提の滝」

9 類 砂時計

32 類 ビール・ミネラルウォーター等

33 類 清酒等のアルコール飲料



当商標のご使用に付いては京すずめに  
問合せ下さい。

ノーベル文学書受賞作品『古都』に登場する「菩提の滝」

## 7. 京すずめ創立 20 周年を迎えて

### 京すずめ創立の経緯

京すずめは 2001 年に「非営利活動法人遊悠舎京すずめ」としてスタートさせて頂き、京の暮らしの廻りの文化遺産の発掘発信する活動を進めて参りました。現地現場で開講する京すずめ学校を京都各地で開講して、カリキュラムの初年度は「京都水物語」「京都土物語」「京都木気物語」「京都愛物語」というように、毎年テーマを決めて現地現場で体感して学んで参りました。

京都を愛した文人、先人がどのような京都に魅力を感じていたのかというカリキュラムを組みましたのも、活性化のヒントになると思ったからです。その「京都愛物語」のオープニング講座に「川端康成の愛した京都」と題して川端康成記念会理事長の川端香男里先生からノーベル賞受賞前からの康成先生の京都への想いを縷々お伺いし、更に康成先生ご生誕 110 年を記念して香男里先生や皆様と、北山杉の中源様のご所有の山林で記念植樹も行い、思い出をつくることができました。

また、黒澤明監督が定宿にされていた旅館石原のご当主や女将さんからも監督がどのように京都に魅かれておられたのを黒澤ルームで開講させて頂き、歴代の天皇がどのように京都を愛されていたのかを京都御苑でも開催させて頂きました。また、『古都』も映画化させて頂き、鎌倉の川端邸をお尋ねした時、お庭に北山杉が綺麗に天に向かっていたことが、とても印象に残り、ご自宅でも京都の雰囲気を感じておられたことが伝わってまいりました。

この講座から誕生したのが「京都への恋文」公募事業です。また JICA のお仕事で海外の政府観光行政官等の研修を数年間担当させて頂いたことも、大きな要因です。文化や風習が異なる海外の方でも、京都の魅力を驚くようなことを感じておられるということを知ったことも公募の発想となりました。

2018 年スペイン日本国交樹立 150 年の年には、日本政府観光局 (JUNTO)、日本貿易振興機構 J (ETRO)、国際交流基金 (JF) の主催でマドリッドで日本セミナーを担当させて頂いたことで、更に京都の魅力に引き込まれたものでした。

|           |   |
|-----------|---|
| 2001年     | 遊悠舎京すずめ創立   |
| 2001年     | 遊悠舎京すずめ披露の夕べ開催  |
| 2002年     | 京すずめ学校開校カリキュラム開校  |
| 2002年～03年 | 京都水物語   |
| 2004年     | 京都土物語   |
| 2005年～06年 | 京都木・気物語   |
| 2006年～07年 | 京都活物語・京都火灯物語  |
| 2008年～10年 | 京都愛物語   |
| 2010年～12年 | 京都名水物語  |
| 2011年 9月  | 被災地支援風のチャペルプロジェクト・ハネムーン IN 京都                                 |
| 2011年 10月 | 被災地支援福島高校総合文化祭出演者との交流   |
| 2011年 11月 | 福島県相馬市向陽中学校京すずめ学校を銀閣寺書院で開催                                    |
| 2012年 7月  | 福島県安積高校合唱部の歌の奉納・銀閣寺 京すずめ学校                                    |
| 2012年～13年 | 京都愛物語Ⅱ  |
| 2013年 10月 | 二条城にて被爆アオギリの記念植樹 福島県会津高校                                      |
| 2013年 10月 | フランス・パリ京すずめ学校の開校  |
| 2013年～16年 | 京都活物語Ⅱ  |
| 2014年 10月 | 福島県会津高校 二条城にて京すずめ学校   |
| 2015年 10月 | ブータン王国ワンチュク国王陛下より下賜の国樹イトスギを二条城に植樹、福島県会津高校                     |
| 2016年 7月  | 京都愛物語川端康成作品『古都の風景を感じる』最終講座                                    |
| 2017年 9月  | 一般社団法人京すずめ文化観光研究所へ移行  |
| 2017年 11月 | お披露目会 井上章一先生講演 明治維新から150年の京都                                  |
| 2018年 3月  | スペイン日本外交樹立150年記念日本セミナーマドリッド<br>JNTO JETRO JF CASA ASIA 主催 4講座 |
| 2018年 12月 | 第一回おくどさんサミット開催  |
| 2019年     | 第三回京都への恋文公募開始   |
| 2019年 5月  | 令和元年記念桓武天皇がお召しになった黄櫨染を復活して染師祐齋亭での京すずめ大学校開催                    |
| 2019年 6月  | 川端康成生誕120年記念京すずめ大学校   |
| 2019年 12月 | 第二回おくどさんサミット開催  |

81 講座の京すずめ学校と 10 回のフィールドワーク、2 回の京すずめ大学校、  
お2回のおくどさんサミット開催、京都への恋文  
合計 91 回の講座を開校（2010 年に講座とフィールドワークを統合）  
「京都への恋文」公募事業3回の実施と表彰式、被災地支援、東日本大震災支  
援活動 7 回、番外編 2 回(阪急電鉄ええまちづくり隊様、阪急電鉄社員様向け  
京すずめ学校)海外での京すずめ学校等

通算 114 回の講座開催

## 京すずめ 20年のあゆみ



お花見のルーツ此花之咲夜姫  
フィールドワーク 2002年4月



京都水物語 京の水が育てた京の味  
本田味噌本店 本田茂俊社長



京都水物語 お酒と名水 松本酒造  
京都水物語 松本保博氏



京美人のルーツ  
垢ぬけるとは 井上章一先生



京都水物語 銭湯とトイレの文化史 錦湯



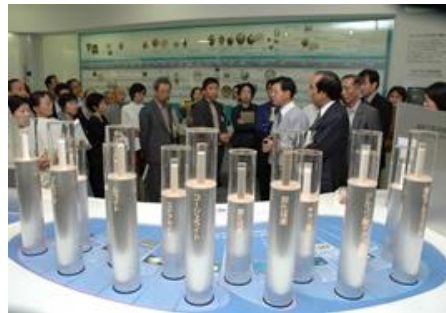
京都土物語 鷹峯常照寺



京野菜農家を訪ねて



京都土物語 京セラ本社にて 徳留正美広報部長



京都土物語 瓦の文化史  
西本願寺御影堂  
修復工事現場 寺本甚平衛氏



京都土物語総集編「土も心」  
河合隼雄先生(文化庁長官)





京都土物語総集編 土と心 河合隼雄先生



京都木気物語 北山杉の知られざる歴史を訪ねて 中源株式会社



北山磨丸太を  
菩提の滝の砂で磨く作業



京都木気物語総集編  
無鄰菴見学と講座



京都木気物語総集編 木と心 第11代小川治平衛氏



京都木気物語 お香の文化史 松榮堂



東寺 観智院 浜田泰介画伯の障壁画を浜田画伯が語る 東寺書院にて講義



京都木気物語 桜 醍醐三宝院



京都木気物語 水引の文化史 奈良時代創業の源田紙業(ニュージーランドから)



京都木気物語 檜皮葺ルーツを探る 宮川友一氏



京都活物語 桓武天皇が鬼門に対して天門に創建した神社 大將軍八神社  
日本人形のルーツ平安童子を前にして 生寫暢宮司





書院で講義



京都活物語 京都近代化学の構想と琵琶小疏水 琵琶湖疏水記念館  
平安神宮 本多和夫氏



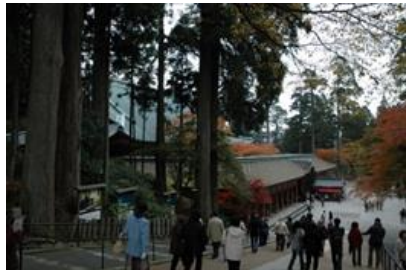
京都活物語 平安京遷都 桓武天皇のまちづくり 大徳寺真珠庵 山田和尚



京都火灯物語 祭と提灯 提灯の文化史 高橋提灯工房



高橋提灯工房



京都火灯物語 比叡山延暦寺 書院にて



京都火灯物語 和ろうそく 丹治蓮生堂



京都火灯物語 おくどさん体験講座 山口家住宅



おくどさんで焚いたご飯を試食



京すずめ学校 京都愛物語 川端康成の愛した京都



京都愛物語 黒澤明の愛した京都 京の宿石原 黒澤ルーム





京都愛物語 祇園祭を愛した京都人 鉾引き初め体験



京都愛物語 徳川家康の愛した京都  
二条城二の丸御殿台所



司馬遼太郎の愛した京都  
岩屋山志明院 田中眞澄住職



京都愛物語 土方歳三の愛した京都 フィールドワーク



京都愛物語 映画二人日和 フィールドワーク 京都御苑



京都名水物語 松井酒造



『古都』フィールドワーク

### 被災地支援



被災地支援 銀閣寺書院 相馬市向陽中学校の皆様をお迎えして  
京すずめ学校 2011年11月4日





被災地支援福島県安積高校合掌部  
合唱奉納 銀閣寺本堂



記念撮影



2014年二条城に被ばくアオギリの記念植樹



記念撮影



ブータン王国ワンチュク国王陛下より下  
賜の国樹イトスギを二条城  
植樹、福島県会津高校



ブータン王国の国樹・イトスギ



会津高校の皆様をお迎えて 京すずめ学校

第一京都への恋文表彰式 嵐山松籟庵



川端審査委員長の講評



表彰式の様子



表彰状の贈呈



市川崑監督映画「京」の鑑賞



副賞の贈呈





副賞の贈呈



NHK テレビラジオの取材



表彰式終了後記念撮影

## 第二回京都への恋文表彰式 若宮八幡宮



第2回京都への恋文表彰式 川端審査委員長の講評 門川京都市長のご挨拶





書画奉納実演 小林芙蓉先生



NHK テレビの取材



パリ京すずめ学校



マドリド京すずめ学校 2018年3月日本スペイン外交樹立150周年記念日本セミナー

2日間に渡り4講座を担当 JNTO, JETRO CASAASIA 共催, JF 協力  
テーマ「ガイドブックに出ていない奥深い京の魅力と生活文化を学ぶ」





スペイン・マドリード CASA ASIA

第1回おくどさんサミット 平野屋



第1回おくどさんサミット 平野屋 2018年12月 平野屋のおくどさん



第2回おくどさんサミット あぶり餅一和 2019年12月

## 受賞、その他の活動



京都府より新世紀かがやき交流賞受賞 国交省文化観光懇談会で京すずめの活動をプレゼン 2006年6月19日



第1回地域再生大賞優秀賞受賞  
2011年 共同通信社

世界文化遺産地域連携会議発足式



創立12周年で作成したポスター



あぶり餅一和おくどさんの取材 2012年元旦

## 8. 京すずめ瓦版から

京すずめ瓦版 9号 2006年6月1日発行分

東京都 富岡國明

京の心を求めて

京すずめ学校に東京から通学しています。昨年10月JALのツアー「土居好江がご案内する庭園から学ぶ京のこころ」へ参加したのがきっかけです。

京都には50年前の修学旅行以来10数回訪れ、すっかり「見た」と思っておりました。しかし歳を取るにつれ京都に一遍ではない「何か」を求めていたところでした。

そんな折、土居さんのレクチャー付きの散歩、更に講座で小川治平衛氏の「庭づくりの心」を聴き、求めていたのはこれだ！実際、京に暮らし、連綿と伝統を受け継いでいる人の生の声が聞きたかったのだと得心いたしました。

以来、受講を重ね「京」の奥深さの一端に触れる度に、新鮮な驚きと興奮を覚え、益々もって参加が楽しみなこの頃です。京すずめ学校に感謝！。

京すずめ瓦版9号 2006年6月1日発行分

首都大学東京 都市環境学科 教授 秋山哲男

京すずめをたずねて

土居さんの企画により京都2泊3日で23ヶ所を訪問したのは30年間でまったく初めての経験でした。私は京都にはすでに10回は行きましたが、今回の京都の旅は、京都ではない京都を見せていただきました。もし、土居さんの企画がなかったら、表面しか京都を知らないでいたかもしれません。

最も印象に残ったのは、なんとと言っても1日を過ごさせて頂いた嵐山の裕齋先生のところでした。先生が染物でプロを感じさせる染料で少し汚れていた手を見ながら、お酒を酌み交わし、居眠りをしながらお話を伺っていました。

外の花を見ながらの心地よい夜でした。また、水禽窟のトイレや美味しい水、そして嵐山の落ち着いた風景などは、日常的に飛び回っている私には時間を止めて頂いたように思います。ここ10年まったく経験していなかった「立ち止まって考える」そんな時間が今回の京都では持てたように思います。

もう一つは京すずめと土居さんのバイタリティ、特に「水」をモチーフとして京す

ずめ学校の企画は迫力があり、本当に「語れる人」に語ってもらい、土居さんの姿勢からは「妥協しない意味」を教えて頂きました。私も次に企画するときには土居さんを真似しようと思いました。

2ヶ月たってもまだ京都のまち・人・体験・食事が懐かしく思います。ここ2週間講演依頼など幾つかきましたが、京都市からの依頼は真っ先に引き受けました。

## 発刊物



## 9. 編集後記

お陰様で創立20周年の節目に「京都への恋文」と「京すずめのあゆみ」の冊子を発行させて頂き、感謝の気持ちで一杯でございます。「十年一昔」と申しますが、アツと言う間の20年でございます。20年を振り返り、お世話になった方々のお顔が浮かびます。10年分の「京都への恋文」の応募作品すべてに何回も目を通し、京都の魅力・魔力を再び発見できました。お世話になりましたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。



## 10.「京都への恋文」後援、協力、協賛企業

|      |            |          |
|------|------------|----------|
| 後援   |            |          |
| 京都府  | 京都市        | 京都商工会議所  |
| 京都新聞 | 国際交流基金京都支部 | 京福電鉄(嵐電) |

|      |      |       |
|------|------|-------|
| 協力   |      |       |
| 京都銀行 | 愛染工房 | 若宮八幡宮 |
| 松籟庵  |      |       |

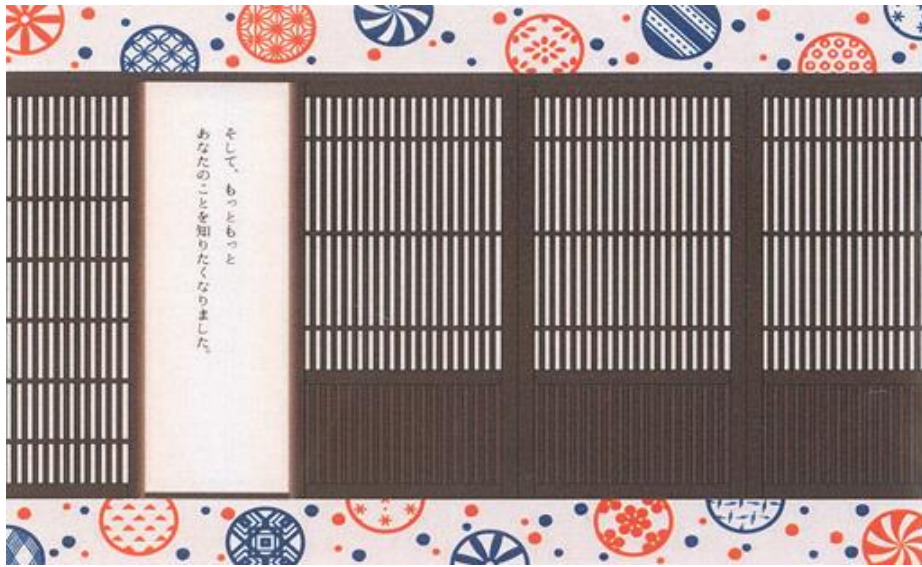
|          |          |        |
|----------|----------|--------|
| 賞品ご提供企業様 |          |        |
| 柊家       | 松籟庵      | 浜田泰介画伯 |
| 京の宿石原    | 中源株式会社   | 嵐山祐斎亭  |
| 愛染工房     | 松井酒造株式会社 | おぶぶ茶苑  |
| 雲楽窯      |          |        |

|              |            |                   |
|--------------|------------|-------------------|
| 協賛企業         |            |                   |
| プレマ株式会社      | あぶり餅一和     | 柊家                |
| 松籟庵          | 鷹峯 常照寺     | 京の宿 石原            |
| 浜田泰介画伯       | 入山豆腐店      | 嵐山祐斎亭             |
| 雲楽窯          | 愛染工房       | 若宮八幡宮(陶器神社)       |
| 知財支援機構(株)    | センルーカス(株)  | ジェノコンシェルジュ京都(株)   |
| 中源株式会社       | オフィス絵夢     | (株)中島農園農業生産法人     |
| 奥田左官工業所      | 松井酒造(株)    | 大坪正典(筆名:柊正也)      |
| 半兵衛麩         | (株)morondo | 京都ブータン王国交流協会      |
| (株)キングアソシエイツ | DOI ART    | NPO法人 尚美流 全日本和装協会 |

著作権 © 一般社団法人京すずめ文化観光研究所

京すずめ文化観光研究所発行の「京都への恋文」の内容(文書・画像等のデータ)の著作権は京すずめ文化観光研究所に帰属します。また、一部の画像などの著作権は原著者が所有しています。本ホームページ上の文書、画像などの無断使用、無断転載、二次使用はできません。

京すずめ文化観光研究所「京都への恋文」の記載内容(文書・画像等のデータ)のご利用については、事前に京すずめ文化観光研究所に、ご利用の確認と許可を取っていただけるようお願いいたします。



第二回京都への恋文応募作品 森 信歩 東京都

**【編集発行】**

〒600-8413 京都市下京区烏丸通仏光寺下ル大政所町 680 -1

第八長谷ビル 2階 231 京すずめ文化観光研究所

京すずめ HP: <https://kyosuzume.or.jp/>

e-mail: [hp@kyosuzume.or.jp](mailto:hp@kyosuzume.or.jp)

電話 070-6500-4164

非売品